



TITLE:

# 古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム -- 「他動詞＋在」結果構文を例として--

AUTHOR(S):

松江, 崇

---

CITATION:

松江, 崇. 古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム -- 「他動詞＋在」結果構文を例として --. シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役の諸相 2019: 205-217

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245174>

RIGHT:

# 古代中国語における動補型結果構文の拡張メカニズム＊ —「他動詞＋在」結果構文を例として—

松江 崇

## 1. はじめに

現代中国語（標準語）には、「主語（S）＋他動詞（Vt）＋結果補語（自動詞 Vi／形容詞 A）＋目的語（O）」という統語形式で「動作主 S の行為 Vt によりその対象 O に結果状態 Vi/A を生ぜしめる」という広義の使役的意味を表す結果補語構造「Vt＋Vi/A」がみとめられる<sup>1</sup>。この構造は、機能上、いわゆる結果構文（resultative construction）に相当するため、本稿では、この類の結果補語によって構成される結果構文を動補型結果構文と称することにする。

動補型結果構文の成立は、中国語史において重要な意味を持つ。この構文は上古中国語（殷～前漢）には存在せず、上古中国語と現代中国語の統語構造面での最も大きな差異の一つに数えられるからである。この構文は、中古中国語（後漢魏晉南北朝）の頃に出現したと考えられ、その生成過程についてはすでに膨大な研究が蓄積されている<sup>2</sup>。しかしながらこの動補型結果構文が中古中国語の段階で生成された後に、どのようなメカニズムによって、そのカテゴリーに属する成員を拡張していったのか、というカテゴリー拡張のメカニズムについては、十分な注意が払われているとは言えない。後述するように、歴史的にみれば、ある時点で突如として現代中国語と同じ動補型結果構文が出現したのではなく、様々な拡張のプロセスを経て、現代語における動補型結果構文が生成されていったと考えられるのである。本稿は、以上を踏まえ、現代中国語の動補型結果構文としては周辺の成員に位置づけられる「他動詞（Vt）＋在」結果構文の生成過程に着目し、動補型結果構文の拡張メカニズムの一端を明らかにすることを目的とする。

＊ 本稿の主要な部分（2.～5.）は中国国内で刊行予定の『第十屆漢文佛典語言學國際學術研討會會議論文集』に収録される中国語論文「略談“動詞＋補語”型使成式的擴展機制——以早期漢譯佛典中“他動詞＋在／到”型使成式為例」に基づく。ただし内容上は大きな修正点を含み、かつ本稿では「Vt＋到」結果構文には言及しないなどの違いもある。また当該論文の出版事情により修正稿たる本稿の発表が先行することとなった点も付記しておく。なお、本稿執筆に際して、二松学舎大学の戸内俊介氏から貴重なご指摘をいただいた。記して謝意を表します。

<sup>1</sup> 結果補語構造（結果構文）としてどのようなタイプを認定するかは簡単な問題ではない。例えば、石村（2011）は、①他動型（例：孩子撕破了书皮儿。[子供が本の表紙を引き裂いて破った]）、②受動型（例：书皮儿撕破了。[本の表紙が引き裂いて破れた]）、③自動型（例：张三喝醉了。[張三は飲んで酔っ払った]）、④原因型（例：那瓶酒喝醉了张三。[張三はその酒を飲んで酔っ払った（意識）]）の四タイプを典型的な結果補語構造とみとめる。本稿で言う動補型結果構文は、①に相当するものである（③は含まない）。

<sup>2</sup> 先行研究は枚挙に暇ないが、記述・分析の双方で最も優れた研究の一つに魏培泉 2000 が挙げられる。この他、英語で読めるものとして Xu 2006（4. The Rise of Resultative Compounds）を挙げておく。

## 2. 上古・中古中国語における結果表現

「Vt + 在」結果構文の生成メカニズムを論ずる前に、まずその背景として、典型的な動補型結果構文である「Vt + Vi/A」結果構文の生成過程について検討しておく必要がある。本章では、上古・中古中国語において結果表現を担っていた各種の構文を紹介した上で、先行研究に基づきつつ「Vt + Vi/A」結果構文の生成メカニズムについて述べていく。

### 2.1. 能格動詞・形容詞の他動詞用法

上古中国語において、「(何らかの行為により目的語に対して) ある結果状態を生ぜしめる」という意味の表現を担っていたのは、能格動詞 (Ve) からなる他動詞構文 (以下、能格動詞の他動詞用法) であった (用例 (1)(2))。ここで言う能格動詞とは、自動詞用法と他動詞用法とを備え、自動詞用法の主語の意味役割と他動詞用法の意味役割とが一致する動詞を指す<sup>3</sup>。能格動詞として具体的にどの動詞を認定するのは議論のあるところであるが、上古中国語の動詞体系において、この類の動詞が少なからぬ位置を占めていたことは間違いないであろう<sup>4</sup>。上古中国語では、形容詞も目的語を伴った他動詞構文に用いられることがあり、「(目的語に対して) ある結果状態を生ぜしめる」意味の表現を表すことが少なくなかった (用例 (3))。

- (1) 鄭人大敗戎師。 (『左伝』「隠公九年」1-66)<sup>5</sup>

鄭人は大いに戎軍を破った。

- (2) 若二子怒楚，楚人乘我，喪師無日矣。 (『左伝』「宣公十二年」2-734)

もし彼ら二人に使者が楚を怒らせ、楚軍が急襲してきたら、わが軍が壊滅するまで幾日もないであろう。

- (3) 匠人斲而小之，則王怒，以為不勝其任矣。 (『孟子』「梁惠王下」1-146)

大工が(せっかくの大きな材木を)削ってそれを小さくしたら、王は怒って、仕事ができないと考えるでしょう。

<sup>3</sup> 本稿で言う「能格動詞」は、中国語学の近年の研究では「非対格動詞」と称されることも少なくない (戸内 2018: 5 など)。なお上古漢語に能格動詞が体系的に存在するかどうかという議論については、大西 2004 を参照されたい。

<sup>4</sup> 以下、「敗」の自動詞用法、「小」非他動詞用法の用例を挙げておく (「怒」の自動詞用法は例文 (3) の「則王怒」を参照)。

・呉師敗。 (『左伝』「定公五年」4-1552)

呉軍は敗北した。

・子曰「管仲之器小哉。」 (『論語』「八佾」1-206)

先生が言われた。「管仲は人物が小さいね。」

<sup>5</sup> 文献は書名・篇名の順にあげる。数字は、本稿末に掲げた依拠テキストの冊数・頁数を表す。「1-66」であれば第1冊66頁の意。

上述の現象に関連して、上古中国語動詞のいわゆる「破読」あるいは「四声別義」「清濁別義」と称される問題にも言及しておく必要がある。上古中国語では、語の用法（自動詞用法・他動詞用法の別など）や品詞の区別と、声母（語頭子音）の種類（有声－無声／有気－無気など）や声調の種類（去声／非去声など）の交替とが、しばしばある種の対応関係をみせることがある<sup>6</sup>。用例(1)の「敗」であれば、宋・賈昌朝の『羣經音辨』によれば「毀他曰敗，音拜」（他のものをやぶるのを「敗」という，読音は「拜」）と「自毀曰敗，薄邁切」（自らがやぶれるのを「敗」という，薄邁切）と解説され，かりにこれが上古の実際の発音を反映したものであれば，自動詞用法では有声声母であり（推定音価 \*brāts）<sup>7</sup>，使役的他動詞用法の場合は無声声母（推定音価 \*prēts）であったことになろう。このような現象を網羅的に収集し，言語学的な分析をした周法高 1962 では，本稿の議論と直接的に関わる動詞の使役化について，①去声或いは有声声母の場合に使役的述語となる（例：「来」〈来る〉（平声）を去声で読む場合は使役的述語〈来させる〉），②前項とは逆に非去声或いは非有声声母の場合に使役的述語となる（例：「去」〈去る〉（去声）を上声で読む場合は使役的述語〈除く・去らせる〉，上述「敗」もこの類），③非去声では自動詞用法，去声では他動詞用法となる（例：「語」では上声は〈話をする〉，去声は〈言葉で伝える〉）といった類型に整理している。このような後世の文献に基づいた読音の区別がどれほど上古中国語の実際の発音と符合していたかは議論があるが，少なくともそのなかの一部の動詞については，音韻的交替がその動詞の機能的相違に対応していた可能性がある。そうすると，能格動詞の自他交替についても形態論レベルの議論をすべきということになるだろうが，実際は上述の音韻交替と機能的転換との対応が確認される能格動詞は限定的である。上古中期（春秋戦国期）以降の能格動詞・形容詞の自他変換の現象は，上述の現象に配慮しつつも，原則として統語論に主軸を置いて議論していくべきだと考える。

以上のような上古中国語における「行為とその結果状態」を表す構文は，中古中国語に至ると大きな変化が生ずることになる。能格動詞（Ve）・形容詞（A）の他動詞用法が衰退していくとともに，これらの前に他の他動詞を置いた「Vt + Ve/A」から構成される「S + Vt + Ve/A + O」という統語形式で，「O を Ve/A の状態にする」という行為の結果状態を表す構文が増加したのである（用例(4)）<sup>8</sup>。この構文における Ve/A を担う能格動詞ないし形容詞を非他動詞用法だとみなすことができれば，動詞の連用（連動構造）であった「Vt + Ve/A」が動補型結果

<sup>6</sup> この現象は上古中国語の形態論という難解な問題と関わる。とりわけ欧米の研究者を中心に，しばしばシナ＝チベット祖語の再構までを視野に入れた積極的な議論がなされているが，筆者にこの問題を論ずる能力と準備がないため，本稿では論じない。なお，比較的新しい上古中国語の形態論の体系的な研究に Sagart 1999 がある。Sagart 氏の研究は，重要な視点を提供するものではあるが，丁邦新 2002 が指摘するような種々の問題もあり，必ずしも所説の全てに従うことはできない。

<sup>7</sup> 再構音は，Schuessler 2009 の体系による。

<sup>8</sup> 上古にも一見同様の構造がみられるが，動補型結果構文とみなし得る確実な用例はない。以下の用例における「滅」は他動詞用法であり，他動詞の連用（連動構造）であると解釈される。以下は太田 1958: 200 所引の例（ただし意味解釈に諸説ある個所である。仮に太田氏の訳を引用しておく）

・若火之燎于原，不可嚮邇，其猶可撲滅。（『尚書』「盤庚」2-274）

火が原で燃えるがごとくである。これに向い近づくことはできないが，なお撲滅することができる。

構文「Vt + Vi/A」へと再分析されたことになる。従来の研究では、「Vt + Ve/A」における「Ve/A」が他動詞用法とみなし得るか否かについて多くの議論がなされてきた。この問題については、現在でも決定的な認定指標は提示されておらず、先行研究の結論は必ずしも一致していないが、一般には中古初期の後漢の頃には、少なくとも一部の能格動詞は自動詞用法専用に近づいており、動補型結果構文の萌芽がみられると考えられている（宋亞雲 2004 など）。

- (4) 是諸魔衆，互相催切，各盡威力，摧破菩薩。（『過去現在因果經』4-40c）

これらの悪魔たちは、互いにせきたてあい、それぞれに力を尽くして菩薩を打ち破ろうとした。

## 2.2. 兼語構造

動補型結果構文の成立は、上述した能格動詞・形容詞の他動詞用法の衰退という通時的現象の他、「兼語構造」による使役表現の通時的変化とも密接な関わりを持っている（この点はすでに太田 1958 に指摘がある）。兼語構造とは、動詞連続の形式をとるもののうち、第一動詞の目的語が第二動詞の論理主語を兼ねるもの（＝「兼語」）であるタイプの構造を指す（用例 (5) では「齊」が兼語）。第一動詞が何らかの働きかけを含意する動詞である場合、使役的な意味がもたらされる。そして中古期になると、第二動詞が非対格動詞あるいは形容詞であるものが出現するようになり、動補型結果構文に意味機能が接近した構造——ただし「他動詞＋目的語＋補語」の形式である——がみられるようになる（用例 (6)）<sup>9</sup>。

- (5) 勸齊伐燕，有諸。（『孟子』「公孫丑下」1-289）

齊を勧めて燕を伐つようにしむけたというのは、本当にあったことなのか。

- (6) 王語木工「…擔物之法，禮當用手。由卿口銜，致使墮水。今當打汝前兩齒折。」（『賢愚經』4-429a，太田 1958: 200 所引の用例）

王は大工に言った。「…物を持つときは、手を用いるべきだ。君が口で銜えたために、（斧が）水に落ちてしまったのだ。今、お前の二本の前歯をたたき折ってやろう。」

もう一点触れておくべきことは、上古漢語では、一定程度文法化された「使」「令」が使役動詞として第一動詞に用いられた兼語構造もみられることである（用例 (7)）。この構文は中古にかけてさらに発達し、中古初期には、第二動詞に状態動詞や形容詞を伴うことが多くなった（小方 2002 の指摘による、用例 (8)）。この場合、具体的な行為を表す動詞を欠くけれども、「結果状態を生ぜしめる」という結果表現を担う構文の一つであったとみてよいであろう。興味深いのは、用

<sup>9</sup> この類の構造を、「隔開式動補構造」と呼ぶ論者も少なくない（梅祖麒 1991 など）。



例 (9) のように、中古以降、「令」が一層の文法化を経て、第一動詞と第二動詞との間に生起する形式が出現したことである（古屋 2000, 田中 2008 など参照）。用例 (9) から「令」が脱落すれば、現代語の動補型結果構文に極めて近い構造となる。現代語の動補型結果構文は、このような構文に由来するものも含まれると考えられる。すなわち 2.1 で述べた「他動詞＋非対格動詞／形容詞」に由来するものと、用例 (9) に由来するようなものとの複雑な過程で合流しつつ、近古（唐宋）以降の動補型結果構文が形成されていったと推定されるのである。ただしその具体的なプロセスは必ずしも明確にはなっていない。

- (7) 寡君使下群臣為二魯衛一請上曰「無令輿師陷入君地」  
（『左伝』「成公二年」2-794）

わが君は私たちを使わし、魯衛のために（あなたに軍隊を引き上げることを）お願いさせたのであり、「斉国に深く入ってはならない」と言われました。

- (8) 怒觸不周之山，使天柱折，地維絶。  
（『論衡』「談天」2-469，小方 2002 より引用）

（共工は）怒って不周之山にぶつかり、天柱を折り、地維（＝大地をつなぐ綱）を絶った。

- (9) 象師散閣將象至會。尋使工師，作七鐵丸，燒令極赤。  
（『賢愚経』4-372a～b，田中 2008 所引の例）

象使いの散閣は象をつれて集会に現れた。すぐに職人に七つの鉄の玉を作らせ、続いて（それを）焼いて真っ赤にさせた。

### 3. 「Vt + 在」結果構文の中古資料における共時的状況

本章では、以上を踏まえ、「Vt + 在」結果構文が生成されるメカニズムを論じていく。資料は、主に中古期に成立し、当時の口語の状況を比較的多く反映するとされる初期漢訳仏典を用いる。具体的には『中本起経』（207 年前後に成立か）、『六度集経』（252 年に江南で成立）、『出曜経』（399 年に成立）、『賢愚経』（445 年あるいは 435 年に成立）、『雜宝藏経』（472 年に成立か）などである。

#### 3.1. 「Vt + 在」結果構文の定義

本稿で言う「Vt + 在」結果構文は、以下のごとき構文を指す。

- (i) 統語形式：主語（S = 動作主）＋〔前置詞 P + 前置詞目的語 Op（＝対象）〕  
＋他動詞 Vt + 在（＋于）＋ O（＝帰着点）

- (ii) 動補構造（「Vt + 在」）の結合価：三項（動作主・帰着点・対象）、二位（動作主・帰着点）<sup>10</sup>。
- (iii) 構文的意味：動作主（S）の行為（Vt）の実現により、対象をある帰着点（O）に定位せしめる。

すなわち、現代中国語における「你把那本書放在桌子上吧。」〔あの本を机に置きなさいよ。〕のような用例がこれにあたる。結果補語構造のVtの論理目的語（一般に〈対象〉）が、結果補語構造全体の目的語（〈帰着点〉）と一致しない点で、典型的な動補型結果構文の「Vt + Vi/A」結果構文とは異なる。なお、「你坐在椅子上吧。」〔椅子に座りなさいよ。〕のような文は、構文的意味の面で「定位せしめる」という広義の使役的な意味を持たないため（動作行為の結果、定位するのは動作主S）、「Vt + 在」結果構文とはみなさない。

もう一点、補足しておくべきことは、現代中国語の「Vt + 在」結果構文は、一般的には前置詞「把」を用いた「処置構文」の一種とみなされ、「定位せしめる」という広義の使役的な意味は、前置詞「把」からなる処置構文の構文的意味と結びつけられていることである。確かに現代中国語を共時的にみれば、このような分析が合理的なのであろうが、以下にみるように、歴史的には、「Vt + 在」という構造自体が、「把」などの前置詞の助けを借りずに、「定位させる」という広義の使役の意味を備えるようになった方が先だと考えられる（前置詞句の生起は随意的）。本稿では、以下において、「Vt + 在」が「Vtの実現により対象をある帰着点（O）に定位せしめる」という結果構文としての意味機能を備えているかを検討していくことにする。

### 3.2. 中古における「Vt + 在」結果構文の萌芽

中古資料において「Vt + 在」結果構文とみなし得るものは多くない。下に挙げたものは「V + 在 + O（＝帰着点）」という統語形式をとるが、いずれも構文的意味の面で結果構文とはみなし得ない。

- (10) 母既至已，嫌母遲故，尋作恨言：「我生在母邊，不如鹿邊生也。」  
 （『雜寶藏經』4-453b）

母親がついてからも、（娘は）母が遅れたことに不満を抱き、恨めしげにいった。「私はお母さんのところに生まれてきてしまったが、鹿のところに生まれたほうがよかった。」

<sup>10</sup> 本稿における動詞の結合価に関する概念は、基本的には現代中国語の結合価を論じた袁毓林（1998）に依拠している。「項（item）」は、動詞が一つの文において支配し得る名詞句の数（前置詞を用いて導かれる名詞句を含む）、「位（position）」は、動詞が一つの文において前置詞を用いずに支配し得る名詞句の数を指す（袁毓林 1998: 100 参照）。

- (11) 海神見是商主能捨珍寶救諸商賈，心生歡喜，取是商主所棄珍寶擔，飛在前。  
(『雜寶藏經』 4-488b)

海神はこの商人の長（＝比舍佉）が財宝を捨て商人たちを救ったのを見ると、喜んで商人の長が海に捨てた財宝をとり、背に負って（比舍佉たちの）前まで飛んできた。

しかし結果構文とみなし得るものも、皆無ではない。以下に挙げる用例は「V + O1（＝対象）＋在＋ O2（＝帰着点）」という兼語構造の O1 が省略された文である可能性を排除できないものが多いけれども、用例 (14) のように、兼語が省略されたとの解釈が成り立ち難い構造も存在するため、これらのうちの一部の「V＋在」は結果構文となり、「定位せしめる」という構文的意味を獲得していたと考えられる。用例 (15)(16) のように、行為の対象が前置詞に近づいた動詞「取」に導かれており、Vt の直後に対象（O1）が省略されているという解釈が不自然な形式が存在することもこの推定を裏付ける<sup>11</sup>。しかし多くの用例が兼語構造とも解釈できるという点で萌芽期であったとも言える。

- (12) 尊者僧迦羅刹『造立修行經』亦作是說「猶如多捕眾鳥，藏在大器。隨時瞻視，養食以時。毛尾既長，隨時剪落，選其肥者，日用供廚。…」  
(『出曜經』 4-655c)

尊者・僧迦羅刹も『造立修行經』のなかでこのように言う。「種々の鳥を多く捉え、大きな器に入れておくようなものだ。つねに観察し、食物として養っておく。羽毛・尾羽が伸びると、隨時切り落とし、太ったものを選び、日々厨房に供するのだ。…」

- (13) 技術已備，師復試其意。師飲鹽湯，即吐在地，使弟子食之。  
(『出曜經』 4-673c)

（弟子である婆耶羅に）技能が備わると、師匠は、さらに彼（＝弟子）の心持ちを探ろうとし、塩湯を飲むとすぐに地に吐き出し、弟子にそれ（＝吐き出されたもの）を食べさせようとした。

- (14) 尊者答言「我念往昔五百世中生於狗中，常困飢渴。唯於二時，得自飽滿。一值醉人酒吐在地，得安樂飽。…」  
(『雜寶藏經』 4-484a)

尊者が答えて言った。「私は過去の五百世において犬に産まれたが、いつも飢えと渇きに苦しめられた。ただ二回の機会に満足に食べられた。一つ目の機会に、酔った人が酒を飲んで地面に吐いた時であり、（この時は）安心を得、腹一杯たべるのを楽しんだ。

<sup>11</sup> 中古の前置詞化した「取」は基本的には漢訳仏典にしか見いだされないため、これを原典言語（サンスクリットなど何らかのインド語）の影響で文献上に生じたものにすぎない（すなわち現実の中国語口語としては存在しなかった翻訳文体）という見方もある（曹廣順・遇笑容 2000、曹廣順・龍國富 2005 など）。これに対して、中国語の連動構造から発展したものとして解釈可能とする見方もある（趙長才 2010）。本稿は、かりに「取」の前置詞化が原典言語の影響だったとしても、用例 (15)(16) の「Vt＋在」に結果構文としての使役の意味が全く備わっていなかったのであれば、漢訳仏典の翻訳者たちがこのような表現を採用したことを合理的に解釈することは難しいと考える。



- (15) 時流離王，取七萬釋種成須陀洹果者生埋在地，暴象踐殺。  
(『出曜經』 4-625a)

そこで流離王は、七万のシャカ族のうち須陀洹果を得たものを（捉え）、地面に生きたまま埋め、暴れ象に踏み殺させた。

- (16) 時婆羅門又語王言「汝身盛壯力士之力，若遭斫痛，儻復還悔。取汝頭髮堅繫在樹，爾乃然後，能斫取耳。」  
(『賢愚經』 4-389c)

その時、バラモンはさらに国王にいった。「あなたは身体が頑強で、格闘家のような力がある。（首を）斬られる痛みを味わえば、恐らく後悔するでしょう。（まず）髪を木に堅く結びつけください。その後に、（あなたの首を）斬り取ることができるでしょう。」

### 3.3. 機能上「Vt + 在」結果構文と対応する二種の統語形式

上で述べたように、中古期においては、「V + 在」結果構文はまだその萌芽がみられる程度であり、言語体系内で重要な位置を占めるには至っていなかった。「動作主の行為の実現により、対象をある帰着点に定位せしめる」という意味は、主として以下にみる「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造、および「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造により表現されていた<sup>12</sup>。

〔構文 (A)：「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造〕

- (17) 爾時世尊，躬自寫水於地，告羅云曰「汝見吾 \* 寫 [宋本・元本・明本「瀉」]  
水在地不乎。」  
(『出曜經』 4-668a)

その時、世尊は自ら水を地にそそぎ、羅云に言った。「お前は私が水を地にそそぐのをみたか。」

- (18) 「…我時即入，盜彼飯食，值彼食器口小，初雖得入頭，後難得出。雖得一飽，然受辛苦。夫從田還，即便 \* 剪 [宋本「摘」，元本・明本「翦」] 頭在於器中。…」  
(『雜寶藏經』 4-484a)

…(犬であった)私は(家に)入り、食べ物を盗んで食べた。(しかし)その食べ物が入った器の口が小さかったため、頭は入れられたものの、後で出られなくなり、腹を満たせたものの苦悩を味わった。夫婦の夫の方が帰ってくると、(私の)首を切り(首は)器の中に落ちた。…

- (19) 時婆羅門舉手欲斫，樹神見此，甚大懊惱「如此之人，云何欲殺？」即以手搏婆羅門耳，其項反向，手腳繚戾。失刀在地，不能動搖。  
(『賢愚經』 4-390a)

<sup>12</sup> 本稿が「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」(構文 (B)) を兼語構造とはせず、連動構造とみなすのは、「著」が〈対象〉と〈帰着点〉のいずれをも同時に目的語としてとり得る(二重目的語をとり得る)動詞だからである。なお、本稿で言う「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造を、「隔開式動補構造」(梅祖麟 1991 など)の一種とみなす立場もあろう。

そこでバラモンは手を挙げて（月光王の首を）斬ろうとした。樹神はそれを見ると、大いに苦悶し苛立った。「どうしてこのような人が殺されようとしているのか」。樹神がすぐにバラモンの耳を手でつかむと、（バラモンの）首は反対に向き、手足がねじ曲がった。（バラモンは）刀を地面に落としてしまい、身動きできなかった。

- (20) 尊者答言「…爾時<sup>13</sup>有諸比丘，於四衢道頭施大高座，置鉢在上，而作是言…」  
（『雜宝藏經』 4-491a）

尊者は答えていった。「…その時、比丘たちは大通りの道端に大きくて高い座を備え付け、鉢をその上にのせ、このように言った…」

〔構文 (B) : 「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造<sup>13</sup>〕

- (21) 昔者菩薩生於貧家。貧家不育，以 \* 褻 [宋本・元本・明本「氈」] 裹之，夜無人時，默置四 \*，并錢一千送著其道。  
（『六度集經』 3-25c）

昔、菩薩は貧しい家に生まれた。家が貧しくて養うことができずに、布で包み、夜人の無い時分に密かに四方に通ずる道に置き去りにし、銅錢千枚を併せて道に置いておいた。

- (22) 妻侍質家女，女浴脱身珠璣衆寶，以懸著架。  
（『六度集經』 3-3a）

（国王の）妻は質に入れられた先の（バラモンの）家の娘に仕えた。その娘は沐浴するために、身に着けていた真珠や様々な宝物をはずし、（それを）骨組みの棚にかけておいた。

- (23) 爾時其夫猶故未寤，還以鑰匙繫著腰下。  
（『雜宝藏經』 4-458a）

その時、彼女（=美しい王女）の夫はまだ目覚めていなかったで、（皆は）カギを再度（夫の）腰に結びつけておいた。

- (24) 大臣孝順心所不忍，乃深掘地，作一密屋，置父著中，隨時孝養。  
（『雜宝藏經』 4-449b）

その大臣は親孝行であったので、（親を追いつ出すのが）忍びがたく、地面を深く掘り、密室を作り、父をその中においておき、隨時世話をした。

この二種の構文にも構文的意味の点での差異がみとめられる。すなわち、構文 (A) では、動作主の意図が行為（Vt + O1）までしか覆っておらず、結果状態（在 + O2）までは及んでいないが（典型的な用例は (17) ~ (19)）、構文 (B) では動作主の意図が結果状態（著 + O2）まで及んでいると考えられるという点である。

<sup>13</sup> 本稿が「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」(構文 (B)) を兼語構造とはせず、連動構造とみなすのは、「著」が「以 + 〈対象〉 + 著 + O (=帰着点)」という前置詞「以」を用いて〈対象〉を導く構文に用いられ得るからである（例：以歡喜園置佛鉢中〔歡喜丸を仏の食器のなかに入れた〕）。そうであれば、構文 (B) は「以 + 〈対象〉」という前置詞句が省略されていると解釈できることになり、構文 (B) は連動構造とみなすことができる。

以下、これらの構文と「Vt + 在」結果構文との機能上の継承関係に着目しながら、「Vt + 在」結果構文の生成メカニズムを推定していきたい。

#### 4. 「V + 在」結果構文の生成メカニズム

上述のように中古期においては、「Vt + 在」結果構文はすでに出現していたと考えられるが、萌芽状態にあった<sup>14</sup>。本稿は、この「Vt + 在」結果構文は、二種の来源持ち、その二種が合流することで生成されたのだと考える。すなわち、来源の一つは上記の構文(A)「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造であり、いま一つは「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造だと推定するのである。

まず構文(A)に由来すると考えられる「Vt + 在」結果補語構造には「吐在」〔～に吐く〕等がある。これらの構造における行為動詞は〈帰着点〉を目的語としてとることができず(中古期には「吐地」という構造は確認されない)<sup>15</sup>、〈帰着点〉との関係は疎遠であった。中古期においては、これらの動詞は構文(A)に生起することはできるが、構文(B)に生起することはほとんどない<sup>16</sup>。ここから本稿は、「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造では、O1がしばしば先行文脈に既出のために省略され「V + 在 + O (=帰着点)」という形式で出現することが少なくないために、この構造が固定化を経て構文へと変化するプロセスを辿ることになったと考える。そしてその時、「Vt + Vi/A」という動補型結果構文への類推が働き——この「在」〔～にある〕はある種の状態を表している点で多くのVi/Aと共通する性質を有する——これが動補構造へと再分析され、動補型結果構文の周辺の構文に位置づけられることになったのだと推定する。以上の推定が正しければ、この類の「Vt + 在」の結果構文としての使役の意味は、兼語構造の有する構造的意味に由来することになる。

構文(B)に由来すると考えられる「Vt + 在」結果補語構造には、「埋在」〔～に埋める〕、「繫在」〔～につなぐ〕等がある。これらの構造における行為動詞は、〈帰着点〉をその目的語にとり得るものであり(以其父母, 生<sub>埋</sub>地中〔その父母

<sup>14</sup> 「Vt + 在」結果構文と密接な関係にあると思われる「Vt + 到」結果構文は、中古期には未だ出現していなかったようである。中古期の資料には「Vt + 到 (+ 於) + O (=移動地点)」という構文が少なからずみられるのであるが、本稿の「Vt + 在」結果構文についての用例(14)(15)(16)のように、それが結果構文であることを強く示唆する用例が、南北朝以前の文献には見出し難い。中古資料において「行為の実現により、対象のある地点に移動せしめる」という意味機能は、主に「V (+ O) + 著 + O2 (=移動地点)」連動構造によって担われていた。

<sup>15</sup> 下列は例外であるようだが、必ずしも中古中国語の反映とは限らない(『法苑珠林』は近古中国語に属する唐代の編纂)。

問「何以作牛。」答「由過去世經他穀田，取五六粒粟口\*嘗〔元本・明本「嚐」〕吐地，以損他粟故作此牛。…」(『法苑珠林』所引『處處經』53-478c)〔(弟子が) たずねた。「どうして牛になったのでしょうか。」(仏は) 答えて言った「過去世に他人の畑を通った時，五・六粒の粟を口に入れてから地に吐いて，その人の粟を損なったために牛になったのだ。…」〕

<sup>16</sup> 構文(B)に現れることもあるが、この時には動作主の意図性が結果状態まで関わっている。次の例を参照。

食竟，洗手漱口。含一口水，吐著舍利弗鉢中，言…(『雜譬喻經』4-506c)〔(バラモンは) 食べ終わると，手を洗って口を漱いだ。(そして) 水を一口に含むと，舍利弗の食器の中に吐きつけて言った…〕

を地中に生き埋めにし]『雑宝蔵経』4-455b;以索繫樹〔縄で木に縛り付け〕『賢愚経』4-422a),〈帰着点〉と密接な関係がある。中古期においては、これらの動詞はしばしば構文(B)に生起するが,「置」など少数の例外を除いて,構文(A)に生起することはほとんどない。ここから本稿は,「Vt + 著」という連動構造の「著」が文法化により動作性を消失して場所を導く前置詞に近づいた結果,「Vt + 在」結果構文への類推が働き,これが動補型結果補語へと再分析されると同時に,「語彙交替」が生じて「著」が「在」取り替えられ,「Vt + 在」結果構文に合流したのだと推定する。この場合,結果構文としての使役的意味は,元来は他動性の高い動詞であった「著」の意味機能(〈対象を〉を〈帰着点〉に付着させる)に由来することになる。

構文(B)の「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造は中古を通じて極めて盛んに用いられた。よってこれが「Vt + 在」結果構文に全面的に取り替わるのは,近古(唐宋)以降だと考えられる。

## 5. 結論

①中古時期においては,「動作主(S)の行為(Vt)の実現により,対象をある帰着点(O)に定位せしめる」という意味を表す「Vt + 在」結果構文は,その出現が認められるものの,萌芽状態にあった。

②「Vt + 在」結果構文の来源は二つあったと考えられる。一つは,「Vt + O1 (=対象) + 在 + O2 (=帰着点)」兼語構造(=構文(A))であり,いま一つが「Vt [+ O1 (=対象)] + 著 + O2 (=帰着点)」連動構造(=構文(B))である。構文(A)では〈対象〉がしばしば先行文脈に既出のために省略され「Vt + 在」という形式で出現したため,これが固定化を経て一つの構文へと変化するプロセスを辿った。このとき「Vt + Vi/A」という動補型結果構文への類推が働き——この「在」[～にある]はある種の状態を表している点で動補構造の多くのVi/Aと共通する性質を備えていた——これが動補構造へと再分析され,動補型結果構文の周辺の構文に位置づけられることになった。構文(B)では「V + 著」という連動構造の「著」が文法化により動作性を消失して場所を導く前置詞に近づいた結果,構文(A)に由来する「Vt + 在」結果構文への類推が働き,これが動補型結果補語へと再分析されると同時に,「語彙交替」が生じて「著」が「在」に取り替えられ,「Vt + 在」結果構文が出現した。よって構文(B)に由来するものは,構文(A)に由来するものが生成された後に出現したのだと考えられる。

③以上の推定が正しければ,「Vt + 在」の結果構文のうち構文(A)に由来するものの結果構文としての使役的意味は,この兼語構造全体が備えていた使役的意味に由来し,構文(B)に由来するもののそれは,元来は他動性の高い動詞であった「著」の意味機能(〈対象を〉を〈帰着点〉に付着させる)に由来することになる。

⑤通時的な観点からすれば、「Vt + 在」結果構文の出現の重要性は、「在」という歴史的にも使役的意味を備えたことのない語が結果補語を担うことになった点にある。この構文において使役的意味は補語によって担われているのではなく、「Vt + 在」という構造全体によって担われていたと考えるしかない。よって「Vt + 在」結果構文の出現は、中古期には動補型結果構文が成立していたことを改めて証明する現象であるとも言える。

### 【参考資料】『雑宝蔵經』における「在」「著」を含む主な統語形式

表 1 『雑宝蔵經』における「在」を含む統語形式

| 「在」の担う統語成分                        | 統語形式                        | 用例数 |
|-----------------------------------|-----------------------------|-----|
| 在 = 述語動詞<br>(文レベル・フレーズレベルのいずれも含む) | (1) 在 (+ 於) + 〈帰着点〉         | 135 |
|                                   | (2) 在 + 〈時間〉                | 8   |
|                                   | (3) 在 + 〈状態〉                | 2   |
|                                   | (4) 在                       | 7   |
| 在 = 前置詞                           | (5) 在 + 〈帰着点〉 + VP          | 35  |
|                                   | (6) 在 + 〈時間〉 + VP           | 3   |
| 在 = 補語あるいは兼語構造の後項動詞               | (7) V + O + 在 (+ 於) + 〈帰着点〉 | 11  |
|                                   | (8) V + 在 (+ 於) + 〈帰着点〉     | 16  |

表 2 『雑宝蔵經』における「著」を含む統語形式

| 「著」の担う統語成分                        | 統語形式                              | 用例数 |
|-----------------------------------|-----------------------------------|-----|
| 著 = 主要動詞<br>(文レベル・フレーズレベルのいずれも含む) | (1) 著 a (+ 於) + 〈帰着点〉             | 18  |
|                                   | (2) 著 a + 〈対象〉 + 〈帰着点〉            | 4   |
|                                   | (3) 著 b + 〈対象〉 (= 衣服)             | 20  |
|                                   | (4) (〈衣服〉 +) 著 b + 〈帰着点〉 (= 身体部位) | 3   |
|                                   | (5) 著 a/b                         | 11  |
| 著 = 補語あるいは兼語構造の後項動詞               | (6) V + O + 著 a + 〈帰着点〉           | 12  |
|                                   | (7) (以 + 〈対象〉) V + 著 a + 〈帰着点〉    | 5   |
|                                   | (8) V + 著 a + 〈対象〉 (= 心理的に執着する対象) | 12  |

\* この他にさらに 5 例あるが、どの類に分類すべきか不明である。

\* 著 a = 『広韻』入声葉韻：著，附也。直略切（澄母葉韻開口三等）

著 b = 『広韻』入声葉韻：著，服衣於身著附也。張略切。又直略，張豫二切（張略切知母葉韻開口三等）



## 使用テキスト

- 『尚書』：『尚書正義』（十三經注疏 整理本），北京大學出版社，2000 年  
 『左伝』：『春秋左傳注（修訂本）』楊伯峻，中國古典名著譯註叢書，中華書局，1990 年  
 『論語』：『論語集釋』（新編諸子集成第一輯），程樹德撰・程俊英・蔣見元點校，北京：中華書局 1990 年  
 『孟子』：『孟子正義』（新編諸子集成第一輯），焦循撰・沈文倬點校，北京：中華書局，1987 年  
 『論衡』：『論衡校釋』（新編諸子集成第一輯），黃暉撰，北京：中華書局，1990 年  
 『中本起經』『六度集經』『出曜經』『賢愚經』『雜寶藏經』『雜譬喻經』『法苑珠林』：『大正新修大藏經』  
 高楠順次郎他，大藏出版社，1924-1934 年

## 参考文献

### 【日本語】

- 太田辰夫 1958. 『中国語歴史文法』江南書院  
 太田辰夫 1988. 『中国語史通考』白帝社  
 石村 広 2008. 『中国語結果構文の研究』白帝社  
 小方伴子 2002. 先秦・兩漢の使動用法と使令兼語式. 『中国語学』249  
 志村良治 1984. 『中国中世語法史研究』三冬社  
 田中希実 2008. 『太子須大拏經』『賢愚經』における“令”使成式とその成立背景『開篇』27  
 戸内俊介 2018. 『先秦の機能語の史的発展—上古中国語文法化研究序説—』研文出版  
 古屋昭弘 2000. 『『齊民要術』に見る使成フレーズ Vt + 令 + Vi』『日本中国学会報』52

### 【中国語】

- 曹廣順・遇笑容 2000. 中古譯經中的處置式《中國語文》第 6 期  
 曹廣順・龍國富 2005. 再談中古譯經中的處置式《中國語文》第 4 期  
 大西克也 2004. 施受同辭芻議—《史記》中的“中性動詞”和“作格動詞”—*Meaning and Form: Essays in Pre-Modern Chinese Grammar*. [意義與形式—古漢語語法論文集]. Ken-ichi Takashima & Jiang Shaoyu (eds.), LINCOM EUROPA  
 丁邦新 2002. 上古漢語的構詞問題——評 Laurent Sagart: *The Roots of Old Chinese*. 《語言學論叢》26  
 梅祖麟 1991. 從漢代的“動，殺”，“動，死”來看動補結構的發展—兼論中古時期起詞的施受關係的中立化. 《語言學論叢》16  
 劉子瑜 2009. 處置式帶補語的歷時發展. 《語言教學與研究》2009(1)  
 宋亞雲 2014. 《漢語作格動詞的歷史演變研究》北京大學出版社  
 王 力 1958. 《漢語史稿（中冊）》科學出版社；『漢語史稿（重排本）』中華書局，1980 年  
 魏培泉 2000. 說中古漢語的使成結構. 『中央研究院歷史語言研究所集刊』71(4)  
 周法高 1962. 《中國古代語法 構詞法》中央研究院歷史語言研究所專刊之三十九  
 袁毓林 1998. 《漢語動詞的配價研究》江西教育出版社  
 趙長才 2010. 《也談中古譯經中“取”字處置式的來源——兼論“打頭破”，“啄雌鴿殺”格式的形成》  
 遇笑容・曹廣順・祖生利（主編）《漢語史中的語言接觸問題研究》語文出版社

### 【英語】

- Sagart, Laurent 1999. *The Roots of Old Chinese* (Amsterdam studies in the theory and history of linguistic science; ser. 4. Current issues in linguistic theory; v. 184), J. Benjamins.  
 Schuessler, Axel 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese, A Companion to Grammata Serica Recensa*, Honolulu: University of Hawai'i Press.  
 Xu Dan 2006. *Typological Change in Chinese Syntax*, Oxford University Press.